

言語ゲーム論 批判のための
準備ノート

橋爪 大三郎

拙作で思考することのできる些き者ならば、私の
ノートも題名をもって読んでもらえるのではなか
らと思う。私は常にしき問題の核心を刺さるなにか
を思いつく。私がいつも狙っているのがそれであ
るから彼は認めることだろう。

——『現実性の問題』37

前期の Wittgenstein と、後期の彼とは、一見してその仕事ぶりもいちぢる
しい対照が目につく。前期の代表作、『論理哲学論考』の、自信に満ちた緻密
な、ゴムパフトな作風に対して、後期の大量の未定稿の、散漫ぶり。語りうる
ことの全てを端整な出版物に盛りこみ、自ら潔く生きはじめた（はずの）彼
と、再び戻った大学で、未刊の書物のために苦渋にみちた演習をつづける彼。
高みをめざして着実に梯子をのぼる彼と、自分を外してしま、た梯子をあるう
ことが軽があら、未曾有の地獄めぐりをはじめた彼。——

あのこれ感嘆めいたことをクツチャベルことは、余人の暇つぶしに任せであ
らう。後期の Wittgenstein は、かすねの皇雲にもたとえらるような、
思索の創造的な混沌として、ある。それがどのような知的事件であるのか。そ
の可能性を自一杯に追求すれば、ゆいゆいどこにも出ることになるのだが、——
これを洞察し、創造的な混沌を收拾しえている論者は、（ゆいゆいの如き限り）
誰もいない。おそらく、この散乱状態にいちばん当惑したのは、Wittgenstein
当人であるのだ。ゆいゆい、試みるに面するたぐひとつのは、彼の苦しみ
と痛みをゆがものとする事、彼をとらえた苦悩の病巣をゆいゆいとゆが身入殺傷
し、ゆいをひとり担いさる事、である。どうあることが、最も嘘のなか



た高潔の戦士 Wittgenstein に丸をのくすということである。

Wittgenstein のようなすぐれた知性をあつたほどの（創造的な）混沌状態に
おとしめたものは、なにが？ いろいろ底状を証拠からみて、彼はきつめな本
質的な問題の磁脈をつきあてていたにちがいない。（未だ準備段階にあるわけ
だが言えるのは、この程度までである。）おそらく、大変なことに気付かんと
していたのだ。後期の Wittgenstein の仕事を追及するがため、20世紀という
画期に加勢な舞台裏を、残らず目のあたりにすることになるかもしれない。後期
の仕事の中心思想は、何と云っても、彼の言語ゲーム (Sprachspiel) の議論に
終らぬ。言語ゲームの着想は、どうやらささいなまっかけでなまっけたらし
いが、ゆいゆい次第に大きな渦巻をなして、終生彼の仕事を導いていくことにな
った。この渦巻は、一時代の苦悩やエロヌローメーのあらかたを呑みこみかね
ないものかもしれない。しかしにしろ、ちまちました日常言語学派や自称の弟
子たちは、この渦巻の直径をはかりかねている。

ゆいゆい、後者は、もういっぺん準備をつんだ上で、この辺りをすこし遠くか
けてみるつもりである。ゆいゆい、どのような内容になるか、どこまで踏みこ
んだものとなるか、まだ予測がつかないが、ここはゆいゆいのための、厚人のメモ程度
のことをあらかじめしるしておこうと思う。後期の Wittgenstein とはこうでござ
い、と手軽にまとめようようなことが、できるわけもない。いまいちいちの論
断に足を踏みこんで展開は尚早という事もある。今後の作業のための先回
りしたお礼だけでもしておこう。

後期の仕事は、遺人では壊し、書けずは破りの線りが之しである。ゆいゆい
をみれば、誰しも、正直言ってまあ他人と取っ散らかっているんだらう、と
いう印象をうけるだろう。

ゆいゆいがざっと見た範囲では、どうしたかでも、『現実性の問題 (Über
Gewißheit)』が、もともと道力があり、問題の核心があらゆるとなりかかっ
てい
る論考だと思ふ。たぶん病状する2日前まで書きつづけ、絶筆となつたこの文
章では、明瞭に死を意識しながら、ようやく問題の全貌が見えてきはじめとい
う充実した緊張感と、ゆいゆいもかかゆらなままだ言ふべきことの中心に踏

みこめずにいるという無りとか、手にとるようになりといる。この段階に至って、それまでの手帳でさんご繰りかえしのべりいできた、「言語ゲーム」のアイデアの含意と射程が、はじめとそれとして理解できるように、わたしは思った——そこを明らかにするのは、人間（の営む社会）の（実在の）実態としての「言語ゲーム」である。人間（あるいは、他の実体的ななにか）があって、それが言語ゲームを営んでいるんじゃない、すべての事態の底の底には、ただ言語というゲームと営んでいる、ということだけがあるのだ。それは、宙空に浮かんだ、人間=社会的な事象である。考えようによっては、これほど透徹して廻るしい認識もあるまい。

後期の Wittgenstein が拓きつつある、反地平は、既存の哲学の側からすると、相対主義的にみえる。だが、Wittgenstein 自身が考えあぐねているばかりで、すこしも積極的な主張をもってこないのである…… 実際、言語ゲームのあいこには、既存の哲学の先入見をあげて、相対化するための、思考実験の工夫があるのである。（つまり、操足とりのためのものだとってもよい）しかし、Wittgenstein は、たんなる相対化の熱図からだけできなく、ゆいゆいとかくあらしめしている秩序の本業の姿として、言語ゲームのモデルをつくりだしていったのであり、ついに、さまざまな言語ゲームの残像したものとて、ゆいゆいのありかたを考えるところに、当然行きつくことになる。（このありかたを、彼は、生活形式 (Lebensform) と称する。）

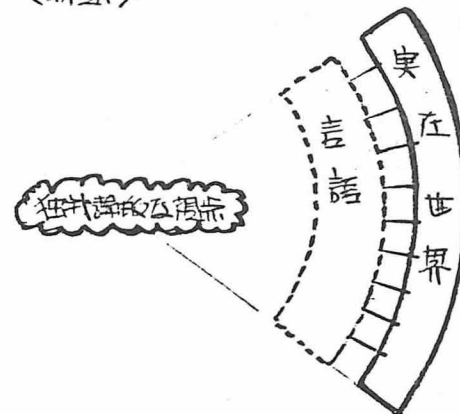
わたしの目下の推測を言えは、Wittgenstein の試みが十分に展開されるなら主/客図式が完全に覆えることになるのではないかと見こまれる。言語ゲーム論による言語批判は、たんに Hegel (唯) 流の形而上学や、非合理主義を駁論するのに有用であるばかりでなく、Descartes 以来の古典的な哲学の伝統——たとえば、Locke-Hume 流の経験論、かたや、Kant、さらには Husserl 系の現象論、Marx、その他——がすっかりそのまき立ち枯れてしまいかねないほどの、酒器力と秘められている。と思われいる。なぜなら、言語ゲーム論の発想をおしすすめていくならば、主在なり主観なりも、また客体なり客観なりも、いかに、言語ゲームの外にあって確実な根拠してたちつづけることが、適ゆなくなってしまうのだから。（もちろん、古典的な哲学の諸派は、いかに、これらの何らかの確実性を足がかりにして、自らを築きあげているのだ。）言語ゲ

ーム論が主/客図式をくつがえすとしたなら、それはたとえは、いわゆる R-O-S 図式のようなインテキくさいやり方ではなくて、全く徹底したものであるだろう。

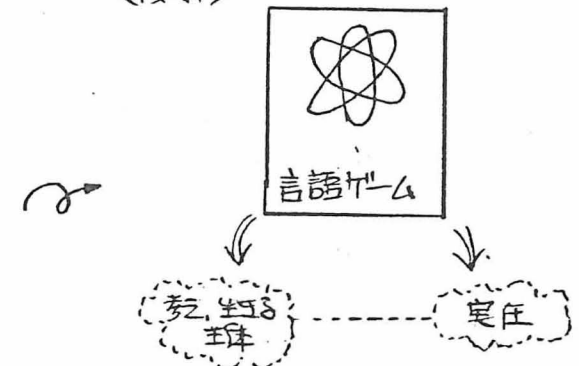
前期と後期の Wittgenstein の仕事をくらべてみると、ある部分は一貫性を示してあり、また別の部分はけちがちな対照をみせている。一貫していると言えるのは、哲学上の行き詰まりや齟齬を、「言語」理解の促進をはかることによつてときどきしていこうとする、治療的態度である。Wittgenstein にとってみれば、哲学上の問題は、ことばのあやに足をとらいた思考のこりかたまりにすぎないのであり、うまくほぐせばのこらず消えてなくなるはずのものである。哲学は、せいぜい語りうることを語るだけのものにすぎず、生がかくあるということそのこと（語りぬこと）のまえは、あはれもなれないものである。それに対して、言語の意味とこのものは、180°の劇的な逆転をあげた、ときこられる。前期の写像理論にあつては、言語は、その意味を、事実世界の世実な隊であることによつて、えていた。それに対して、後期では、言語と事実のどのような結びつきは否定され、言語の意味はその使用法によつて与えられることになる。

それゆえ、前期から後期への転回を、言語を鏗として図式的に描いてみるならば、下のように示しうるかもしれない。前期の場合には、言語は、一方で思考そのものの容であり、他方で実在世界と厳密に対峙していて、それ独自の秩

<前期>



<後期>



序をもつようなものとは考えられていたが、た。言語はいわゆる「ゲーム」の
——語りうるものを語るために世界にあてがわれた「把子」、とでもいうような
ものもまたある。それに対して、後期では、その機能がすっかり反転する。す
たは「語り」が生きはじめている秩序が、言語ゲームなのであり、(哲学的な)
思想も、客観も、そこからうみださねばとこへ還帰するのである。その「み
ださねば、言語ゲームのまごころをいさよ主客をなす風情こそが、かえって語り
のもののたと言えらるる。

(言語ゲーム論はこのように、土台としての生活形式をもちだしてくるのだ
が、その感觸は、晩年の Husserl や、Merleau-Ponty の場合と、興味深い類
似を示している。実際 Wittgenstein と Husserl とのあいだには、偶然でも表
面的でもない逆行関係を見とめるべきだと思ふけれども、このテーマは、然る
べき別の機会にゆずることとしよう。

『哲学的文法』→『青色本』→『茶色本』→『哲学探究』→『確実
性の問題』、とすすむ Wittgenstein の著作が、くりがこしつづきかえして
いるのは、晩年の哲学をとらえているさまさまの差入見である。その文体と論旨が
屈折し、疑問(自問)に満ち、行きつもどりつしてしているのは、要するに、彼の
根底的な攻撃精神(前期の、あるいは現存までの)自己自身に向けられてい
るからに、ほかならない。言語ゲームは、たしかにこのような攻撃のためた
のつと表現される道具である。攻撃の目標は、どのテキストを繰ってみても、
多岐に散漫にみえるけれども、それは、哲学の全体に対して脱自的にならなく
ものだ、といひうる。それゆえ Wittgenstein は、いかなる思想的系譜にも属
さず、いかなる先行者をも持たなかった(持てなかった)のである。

ここで、『確実性の問題』をサマエルとして、Wittgenstein 晩年の言語ゲー
ム論について、みてみるでしょう。

『確実性の問題』という文章は、全体として、Moore の、『常識の確據』に
対する批判にあてられている。Moore のこの論文を、Wittgenstein は彼の最良
の論文とあるとして、たたえたことがある。Moore はこのなかで、自身が確実
に知っているいくつかの命題——たとえば、「ここに手がひとつある」とか、

「私はこれまで地面から遠くはなれて生活したことはない」とか。これら常識
的内容の命題を「わたしは確実に知っている」ということを根拠に、Moore は
哲学的な懐疑や不確実性から守られた、たしかに常識世界を確保しようとする。

Wittgenstein の批判点は、それら確実な常識世界が存することへ、向けられ
ているのではない。むしろその結論(たとえば、「ここに手がひとつある」こ
とが確実であること)は、まったく Wittgenstein の主張でもある。問題は、そ
の確実性がどこから由来するかについてであった。Wittgenstein は、「わた
しは……なことを知っている」とかは、根拠にならないと言ふ。その主張の性
格もあいまいな上に、他人にそんなことをいくら言ってももらって、仕方がな
い(自分の確実性にはならない)から。

Moore は、つぎのように言った:

「ここにひとつの手がある」ということを私が知っているのは、それ
以外のことについてはすべて私の主張をみとめよう。」(1°:『確実性
の問題』の、命題番号。以下同じ。)

Wittgenstein は、おこさまを説く:

「私に——あるいは万人に——どう思われるということから、事実どう
あるという帰結は出てこない。」(2°)

「私はこう言いたい。ムーアは、彼が知っていると主張する事を、実は知
っていないのではない。ただそれはムーアにと、私にとこと同様に、
ゆるがぬ真理なのである。」(151°)

「ムーアの誤りは、ひととはそれを知りえないという主張に、「私はそれを
知っている」という主張を対抗したところにある。」

それは、「ひととはそれを知りえない」という主張に、Wittgenstein はどの
ように対抗するのだろうか? ニニから、Wittgenstein は、Moore をはな
れ、彼独自の思索の圏域へ入るすんでいく。彼は、「ひととはそれを知りえない
のではないが」というような懐疑(それは、言語で表明されるしかないので
ある)が、「ここにひとつの手がある」といふような確信をくっかえたとこは
言語ゲームの性質からしてありえない、と考えられている(ようである)。

たしかにここには、確実なことがある。それほし、論理や経験によって基礎づけられた命題であることが、真であることがたしかめられた知識であるとかのかたちで、あるわけではない。

《私の世界像は、私がその正しさを納得したから私のものになったわけでもない。私が現にその正しさを確信しているという理由で、それが私の世界像であるわけでもない。これは伝統として受けついで背景であり、私が真と偽を区別するのもこれに即ってのことなのだ。》(94°)

こう考えると、論理は哲学の真の象徴であることをやめる。

《「知識」と「確実性」は異な、たかすかりに属する。……(中略)……おもしろ判断なるものが可能であるためには、あり種の経験命題はまったく疑いを受けなければならぬ、ということが大切なのだ。言いかえれば、経験命題のかたちをしたものがすべて経験命題なのではない、と私は考えたのである。》(308°)

《私は、「論理は結局記述されないものである」という主張に、ますます近づいているのではないか。言葉を語る営みを注視せよ、そこは論理が百取される。》(501°)

わいわいは生いついてこのかた、確実なものとして言葉の使い方を覚え、それを生かしている。わいわいの生活は、一連の言語ゲームにみちみちている。

《言語ゲームの記述は、ことごとく論理学に属する。》(56°)

ということは、多分、どのような論理学の命題にも、それに先行して居る言語ゲームを見出さなければならぬ、ということなのだ。

《言語ゲームが成り立つには、……(中略)……原則として何らかの経験命題が疑いを受けなければならぬ。》(519°)

疑いもまた、言語ゲームの営みである！ それゆえ、わいわいは、言語ゲームというひとつのメカニズムが疑いをうみだすのだ、と言ってもよい。

《一定の根拠があるからこそいとは疑うのである。問題は、その疑いがど

のようにして言語ゲームに尊ぶされるのか、ということだ。》(458°)
《すべてを疑おうとする者は、疑うところまで行き着くことはできないだろう。疑いのゲームはすでに確実性を前提している。》(115°)

《疑いはひとつの体系をなしている。》(126°)

《私が示さねばならないのは、疑いはたとい可能であるにしても、不必要であるということだ。言語ゲームの可能性は、疑いうるものすべてが疑いうることを前提してはいない。》(392°)

《全体を疑うことはしないというのが、之も之をわいわいが判断する仕方であり、したがってまた行なうべき仕方であるのだ。》(232°)

それゆえ、どのような疑いであれ、わいわいを全体的に言かすはずはないのである。

《私が本当に言いたいののは、言語ゲームというものは、ひとが何かを信じている場合のみ可能である、ということだ。(私は「何かを信じていることができる」とは言わなかった。)》(509°)

《わいわいの知識はひとつの大きな体系をなしている。わいわいが「風々の知識に認める価値は、この体系のなかでのみ成り立つるのである。》(410°)

《知識の究極の根拠は成り立つ。》(302°)

わいわいを浸している知識の体系は、確実であるけれども、それは、古典的な仕方ではかたがたの基礎をもっている、ということではない。

《基礎づけられた信念の基礎にたっているものは、何ものによっても基礎づけられない信念である。》(233°)

《わいわいは何かを基礎として教えられなければならない。》(449°)

《……なぜ私にと、2、これが私の手であることがどんなにも確かであるだろうか。言語ゲームの全体がこの種の確実性を基礎としているからではないか。》(446°)

Wittgensteinは、こうして、Mooreとは異なったやり方で、懐疑に對抗しおこされたようである。彼は、問題を、わいわいの文法問題として追尾したまう方が、それは彼に、つぎにわいわいの規範問題へとみちびく。

《証拠を基礎づけ正当化する試みはどこかで終る。——しかし、ある命題が断片的に真として直観されていることがその終る点なのである。亦なゆち言語ゲームの根底になっっているのはある種の視覚ではなく、ゆれゆれの當む行為こそそれなのである。》(2040)

《彼は、「私は知っている」という表現を用いないでも、彼の筆指動作を通じてその知識があらわになる、ということを示さなければならぬ。》(427°)

本田引文をあげておけば、ここに、間身体的作用理論のアドタイプを見子にもできるだろう。Wittgenstein は、ひとびとに常識を与え、そこに存在するものとしての、社会を、発見したと言えろ。

《私の生活は、私が多くのことを甘受しているのだから知っている。》(340)

《分別のある人は、ある種のことは決して疑わぬものだ。》

社会は言語ゲームからなりたっているのだが、それは決して固定したものではなく、また底にかすまりしたかたちに定式化できるものでもない。

《言語ゲームはゆれは予見可能なものであるということも、吾は心にとめておかなければならない。私のゆれんとするところはこうである。ゆれには根拠がない。ゆれは理性的ではない(また非理性的でもない)。ゆれはそこにある——ゆれゆれの生活と同様に。》(559°)

Wittgenstein は、確実性をめぐる考察をすすめるうち、ついに二のような言及しがたい基体、言語ゲームとしての社会を振りだしてしまふようである。ゆれは、あたかも宙空に浮かぶもののごとくだ。二いがどのようなありようをしていけるのか、ゆれゆれは、とくを考へてみなければならぬ。

『確実性の問題』以外の、後期の語論考において、言語ゲームはここで紹介したとはまた違つて扱われかたをしている。ゆれらと概観し、併せて、言語ゲームの理論の終極を批判的に検討する作業は、来る本巻にもちこししよう。

REFERENCES CHOICEST

- 江原由美子 1979 「論理哲学論考—初期ウィットゲンシュタインの思想—」, (blue print).
- 『エピステーメ』 1976 vol.2-no.9 「特集 ウィットゲンシュタイン」, 朝日出版社.
- 『言語』 1972 vol.1-no.8 「増頁特集 ウィットゲンシュタイン—言語と哲学—」, 大修館書店.
- Malcom, Norman 1958 Ludwig Wittgenstein: A Memoir, Oxford Univ. Press. =1970 藤本隆志訳, 『思想のウィットゲンシュタイン』, 法政大学出版局.
- Metha, Ved 1963 Fly and the Fly-bottle: Encounters with British Intellectuals, Little Brown and Co. =1970 河合秀和訳, 『ハエとハエとり壺: 現代イギリスの哲学者と歴史家』, みろり書房.
- 『理想』 1975 No.502 「ウィットゲンシュタイン」, 理想社.
- Wittgenstein, Ludwig 1922 Tractatus Logico-Philosophicus, R.& K.P., =1975 奥雅尚訳, 「論理哲学論考」, 『全集』1:1-120. 大修館書店.
- 1958 The Blue and Brown Books, Basil Blackwell, =1975 大森荘蔵訳, 「青色本・茶色本」, 『全集』6:1-298. 大修館書店.
- 1953 Philosophical Investigations(=Philosophische Untersuchungen), Basil Blackwell, =1976 藤本隆志訳, 『哲学探究』(全集第8巻), 大修館書店.
- 1969 On Certainty(=Über Gewissheit), Basil Blackwell. =1975 黒田直訳, 「確実性の問題」, 『全集』9:1-170. 大修館書店.
- 1975 『ウィットゲンシュタイン全集 別冊: 年譜文献』, 大修館書店.

CN 85

HASHIZUME, DAISABURO

¥ 25.-

1979-9-28